

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520260

研究課題名（和文） 19世紀英国の文学と大衆ジャーナリズムにおける移民文化受容と英国性の変容

研究課題名（英文） The Reception of Immigrant Culture and the Change of Englishness in the 19th Century English Literature and Popular Journalism

研究代表者

田中 孝信（TANAKA TAKANOBU）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20171770

研究成果の概要（和文）：19世紀イギリスの文学と大衆ジャーナリズムにおいて、外から内への移民と彼らの文化がどのように表象されているかを、排斥と受容の観点から分析することを通して、英国性の変容を明らかにすることを目的とした。ヨーロッパ大陸からの移民と大英帝国からの移民とに分けて考察を加えた結果、イギリス人の移民に対する姿勢に軽蔑と同時に恐怖と欲望が混在することが判明した。移民文化は次第に受容され、イギリス人と人種的他者との境界が曖昧になり、比較的単一的と思えた英国性は、以前とは比べものにならないほど強く混濁性を帯びるのである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to analyze the representation of immigrants and their cultures in 19th century English Literature and popular journalism from the perspective of exclusion and reception. By making an inquiry into the theme through two kinds of immigrants, that is, both from the Continent and from the British Empire, it has been proved that English people's attitude to immigrants contained fear and desire as well as contempt. Immigrant culture was gradually received, and as a result the boundary between the English and the racial Other became ambiguous. Englishness, which seems to have been rather homogeneous, assumed far more heterogeneity than before.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：19世紀英文学・大衆ジャーナリズム・イーストエンド・東欧ユダヤ移民・中国移民・国民国家・帝国主義・英国性

1. 研究開始当初の背景

(1) 19世紀イギリスの自由主義と、それに続く帝国主義の高まりの中、多くの民族的・人種的他者がイギリスの経済水準の高さに

魅せられてやって来た。「大飢饉」により土地を捨てざるを得なかったアイルランド人や、東欧各地で起こった大規模なユダヤ人襲撃（ポグロム）から逃れるためにユダヤ人は

もちろん、帝国主義戦争によって非ヨーロッパ世界から中国人・インド人・黒人が流入する。彼らはロンドンに自分たちだけの異質な世界を作り出し、周囲の土着労働者社会と対立する。民衆は従来のような寛容な態度を取らなくなる。移民は、既成秩序から見て、犯罪や汚穢を体現する存在なのである。

(2) このような移民がイギリス人や社会にとって持つ意味に関しては、文学研究ではあまり取り上げられることはなく、歴史学や社会学の領域で論じられるのが常である。だが、多くの文学作品においても、本国から植民地へのイギリス人の移動のみならず、国境を越えてやって来る外国人が描き込まれているのである。世紀末文学になるにつれてその傾向は強まり、民族的・人種的他者を抜きにしては語れなくなる。

(3) 研究代表者は、ディケンズの『エドウィン・ドルードの謎』に出てくる阿片窟における中国人とイギリス人中産階級男性との関係を分析し、イギリス人男性のアイデンティティとは何なのかという疑問を持つようになった。それが契機となって、ドイルの『四つの署名』をオリエントからの商品流入の観点から捉え、一見イギリス男性の帯びるべき理性を備えた主人公の裏面を暴き出すに至った。

(4) そうした研究と並行して研究代表者は、「情報化社会の黎明期における日英仏の大衆紙比較研究」〔平成 14～16 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）〕及び「19 世紀後半の英仏文学と戦争報道に関する比較研究」〔平成 18～21 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）〕において、文学作品とジャーナリズムの相関関係を戦争報道という側面から比較検討する機会に恵まれた。ポーア戦争やセポイの反乱の分析を通して、戦争は内から外への動きとは逆の動きをも間接的に引き起こすのではないか、そうした動きは、リスペクタブルな生活や力強い男らしさといったイギリス的価値観に揺らぎをもたらすのではないか、という問題意識を持つに至った。

2. 研究の目的

(1) 植民地獲得競争と国民国家形成の時代にあった 19 世紀イギリスにおいて、活字メディア発展期の文学作品と大衆ジャーナリズムが、互いの競合と協力の中、ヨーロッパ大陸や大英帝国からの移民や彼らの文化をどのように表象しているかを分析することで、移民文化の排斥と受容の変遷を探ることを目的とした。

(2) 特に、従来の研究では移民や彼らの文化

に対する排斥面が強調されていたことに疑問を呈し、受容面をより重視する。「異国趣味」は少しずつではあるが、移民文化の受容をもたらすのではないだろうかという前提を立て、英国性が以前より遥かに強く混淆性を帯びるようになる可能性を探った。イギリス人が劣った（異質なもの）と見なす他者を排除しつつも受け入れるということは、自らの内なる（外国人）を直視することになり、アイデンティティや文化の境界の流動化を引き起こすのである。

(3) 本研究の特色と独自性は、19 世紀の外から内への移民及び彼らの文化と英国性との関係を、都市を背景に文学とジャーナリズムとの係わりで論じようとする点にある。文学の分野ではこれまで移民について、ジャーナリズムとの係わりで論じたものはもちろん、系統だった研究そのものが皆無に等しい。移民を扱った場合でも、国外に出る移民に焦点が絞られている。したがって、一時代の文学をイギリス国内に文化的共同体を築く「移民」をキーワードに通時的かつ共時的に分析するといった点は手薄であったと言わざるを得ない。19 世紀の文学や新聞・雑誌資料に裏付けされた本研究はこれまで類を見ないものである。

3. 研究の方法

(1) 19 世紀イギリスの文学と大衆ジャーナリズムの相関関係の中で、移民文化受容を考察するという研究目的達成のため、研究代表者は、本研究に係わる過去の業績である学術論文・著書・訳書をはじめとし、前述の科学研究費補助金による研究成果を踏まえ、発展的内容となるように努めた。

(2) 研究対象範囲を、ヨーロッパ大陸からの移民と、植民地からの移民に分類し、二つの異なる視点から分析を加えることにした。さらに、彼らが最も大規模に文化的共同体を築いたロンドンのイーストエンドという「繁栄の都の中の外国」に空間上の定点を定めて考察した。

(3) 文学と新聞・雑誌における移民の表象を、移民に対するそれらの言説の共通性と相違性に着目しながら探る一種の文化史研究なので、資料収集と資料の分析、という二つの作業が中心となった。

(4) 大枠として、まず対象となる時代の主要なヨーロッパ内の出来事や海外遠征のみならず、これらを誘発したと想定される政治・社会的動向をも考察範囲に含め、それらと移民との因果関係を押さえた。その上で、イギリスへの移民と彼らの文化の流入と英

国性との係わりを、主に移民と社会問題、移民と地域性といった点において新聞・雑誌がどのように報道しているかを調査した。そこから得た知見を、文学作品における移民表象と比較検討した。その過程で歴史学や社会学の文献に当たる必要が出てきた。

(5) 研究実施のため、対象となる文学作品はおおむね附属図書館に整備されていたが、報道関連の資料については、前述の科学研究費補助金の助成による収集品を活用しつつ、それらではカバーし得ない資料の追加や、現地調査・収集を行った。第一段階として、初年度は報道関連の基礎的資料の購入を計り、『ロンドン・ササイアティ』、『イラストレイティッド・ポリス・ニュース』(追加分)等を購入し、資料のデータ・ベース化を設計した。第二段階では、大英図書館において『ファン』、『ジュディ』など数誌を閲覧した。そして最終段階として、それらから得たデータを用いて、研究の取りまとめを行った。

4. 研究成果

(1) まず、1881年のポグラムを契機とする東欧ユダヤ人移民と彼らのイーストエンドにおける生活に対するイギリス社会の反応を明らかにした。それ以前の差別的なユダヤ人像は、ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』に登場するフェイギンに典型的に表されているのだが、ユダヤ人の政界進出の動きに伴って、『パンチ』と『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』は相反する姿勢を示す。1858年にユダヤ教徒の国会議員が受容されるに至るわけだが、世紀末における東欧ユダヤ移民に対しては、彼らの貧困や不潔さゆえに犯罪と結び付け排斥しようとする。その典型的な例が「切り裂きジャック」事件である。

(2) 当初こそ貧しい東欧ユダヤ移民に対して友愛の感情や寛容な態度が示されたが、それは次第に非難や排斥の姿勢へと変わってゆく。周囲の土着労働者たちを中心にして、そうした見方は社会全体に広がる。彼らの目にユダヤ移民は、イーストエンドにイーディッシュ文化に彩られたゲットーという自分たちだけのまさに外国を作り出す侵略者と映るのである。その中で苦汗労働に従事する彼らは、イギリス人労働者から仕事を奪う脅威となる。同時に激しい肉体労働を嫌うユダヤ移民は、帝国主義の興隆と共に盛んに吹聴された男らしさを欠いた「女々しい」、ジェンダーの差異を侵犯する存在と見なされる。移民は仕事のみならず、住環境をも侵害する者と映る。アイルランド人が豚小屋との繋がりで捉えられたように、ユダヤ移民の住居も不潔でリスpekタビリティとは無縁なもの

と捉えられる。このようにイギリス人はユダヤ人を劣等人種と見なし、自分たちとの間に境界線を設定するわけである。

(3) しかし、興味深いことに、チャールズ・ブースの『民衆の生活と労働』から見えてくるのは、そうした眼差しが孕む多くの逆説や矛盾である。例えば、彼らはリスpekタブルではないが粗野なわけでもない。喧嘩好きで騒々しいが、真面目さや勤勉さといった中産階級の価値観を帯びている。清潔なカーテンといったリスpekタビリティの目に見える表示物こそないが、家庭中心の生活を営む。要するにユダヤ移民は、貧民を生物的に退化した他者と見なすブースの分類に収まらない曖昧な存在なのである。

(4) イギリス人のゲットーへの関心は、イズレリアル・ザングウィルの『ゲットーの子どもたち』が人気を博した点からも窺える。イーストエンドのユダヤ人の生活や世代間の衝突を描いたこの作品は、ザングウィルの短編に見られた主題や、アイロニー、ペイソス、社会諷刺、ユーモアといった技法をふんだんに取り込んだものに仕上がっている。ユダヤ人の生活の様々な側面が、美化されることも否定的な固定観念に陥ることもなく、写実的に描かれているのだ。そうした作品が大成功を収めたことから、いかに社会が未知の世界への好奇心を募らせていたかが分かる。

(5) 次に、中国人移民と彼らの生活に対する社会の反応を明らかにした。そこから得られた知見としてまず言えることは、人種的優越意識、そしてそれと表裏一体を成す逆侵略の恐怖をイギリス人は中国人に対して抱いていたということだ。18世紀のシノワズリーに見られるような中国文化への関心やユートピア的存在としての中国像は、19世紀になると、阿片戦争やアロー号事件を経て、進歩的なヨーロッパに対する停滞した中国という軽蔑的なイメージに取って代わられる。しかし、こうした優越感は大英帝国の中心に〈異質なもの〉としての中国移民が共同体を形成するにつれて、イギリス人の中に中国人化の恐怖を引き起こす。それが典型的に表れているのが阿片窟での阿片吸引の場面である。ディケンズに始まって、ドレ、グリーンウッド、ワイルド、ドイルたちは中・上流階級男性の墮落・退化を描写する。阿片はイーストエンドにとどまらず、中・上流階級の家庭にも様々な形で浸透する。それへの恐怖心は黄禍論となって排斥運動にまで発展する。サックス・ローマーは悪人フー・マンチャーを主人公にした一連の小説で人気を博す。これは19世紀後期のロンドンの阿片窟に対

する警戒心をもとに書かれたものだが、義和団の残虐行為に関する新聞報道、義和団を密かに支援しているとされる清王朝への怒り、その他特派員からの多くの誤った報告に助けられて、中国人嫌いはますます激しさを増したのだった。

(6) しかしほぼ同時期にトマス・バークが、『ライムハウスの夜』で中国人を必ずしも悪ではなく、逆にイギリス人の卑劣さをも浮き彫りにした点は注目し得る。「フー・マンチュー」シリーズに見られた善なるイギリス人対悪の中国人という二項対立構図は瓦解する。『ライムハウスの夜』は、イーストエンドの困窮する一画から、既成の中国人観がいかに現実を反映していないかを発信するのである。特に中国人男性と白人女性の性的関係の描き方において、ローマーとバークは正反対の態度を取る。前者が、邪悪な中国人がイギリス人女性に対して抱く飽くなき好奇心は、西洋を破壊しようとする悪魔のような黄色人種の計略の一部なのだとするのに対して、後者は、中国人男性と恋に落ち、ロンドンを東洋風の「不潔さと愛らしさの場所」に劇的に変化させるコクニーの少女を描き出す。『ライムハウスの夜』は、社会から見て、過度の人種的寛容さと思えるもの、異種間混淆を奨励する道徳的に不埒なものとして映るのである。それが同時に、「嫌悪の魅力」となって多くの読者を惹きつけたのだった。

(7) イギリス社会は、移民や彼らの文化に対して軽蔑や恐怖を抱くと同時に、彼らの生活に自分たちと同じ価値観を見出したり、自分たちが潜め持つ欲望を彼らに投影している点が明らかにされた。移民に対する両義的な態度は、両者の境界を曖昧にし、英国性が混淆性を帯びる動きを加速させるのである。この傾向は 20 世紀になって、バングラデシュや西インド諸島といった旧植民地から多くの移民が押し寄せてくるにつれてますます強まる。それは従来のアイデンティティにとっては危機的状況と言えるが、同時に新たなエネルギーを生み出し、秩序の再構築をもたらす可能性を秘めているのである。

(8) ブースの『民衆の生活と労働』の綿密な読みを通して、ユダヤ移民とイギリス人の価値観の共通性を明らかにした点、及び黄禍論にばかり目が向いていた従来の国内外の研究に疑問を呈し、バークの作品を再発見した意義は大きい。

(9) 研究代表者は、文学作品と大衆ジャーナリズムの分析を通して移民を、近代国民国家形成の流れに対立する概念として捉え、イギリス人と共通の価値観を持った存在、また

抑圧された欲望を表出させる触媒としての役割を担う、自他の境界を曖昧化させる存在と位置づけた。その成果を『スラム小説に見るイーストエンドへの眼差し』として出版した。さらに、この主題と関連した発表を、日本英文学会や日本ギヤスケル協会のシンポジウムで行った。こうした成果を踏まえて単行本として出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①田中孝信、「『妻たちと娘たち』における姉妹の絆」、『人文研究』、査読有、62 巻、2011 年、45-58 頁

〔学会発表〕(計 2 件)

①田中孝信、「世紀末ロンドンのイーストエンド—慈善活動に駆り立てられる淑女たち」、日本ギヤスケル協会、2012 年 10 月 6 日、中京大学

②田中孝信、「放浪者への眼差し—その秘められた欲求」、日本英文学会、2011 年 5 月 21 日、北九州市立大学

〔図書〕(計 3 件)

①田中孝信、アティーナ・プレス、『スラム小説に見るイーストエンドへの眼差し』、2012 年、49 頁

②田中孝信、大阪教育図書、「ギヤスケル、コリンズ、ディケンズの描くオールド・メイドと女同士の絆」(『生誕 200 年記念 エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』)、2010 年、69-79 頁

③田中孝信、溪水社、「女同士の絆—連帯するスピンスターたち」(『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化—生誕二百年記念』)、2010 年、311-28 頁

〔その他〕

①田中孝信、監修、アティーナ・プレス、「19 世紀後半から 20 世紀初頭のロンドンのスラム街小説—闇の奥イーストエンドの人々と生活」、第 2 集、全 7 巻、2012 年

②田中孝信、監修、アティーナ・プレス、「19 世紀後半から 20 世紀初頭のロンドンのスラム街小説—闇の奥イーストエンドの人々と生活」、第 1 集、全 7 巻、2011 年

③田中孝信、秋の市大授業、「『嵐が丘』の故郷を訪ねて」、2011 年 10 月 10 日、大阪市立大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 孝信 (TANAKA TAKANOBU)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20171770

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし